「東大式 世界を変える イノベーションのつくりかた」



編者：東京大学i.school
出版：早川書房
発行：2010年５月25日

21世紀の知識社会の変化の中で新たに出現する社会に適応するイノベーティブな人材を生み出すために、東京大学に創設された新しい教育プログラム i.school で世界も注目するノウハウを公開し、未来予測や社会問題の解決まで幅広く応用できるツールが満載している。

東大全学から数十名の学生たちが選抜され、プログラムは数日間にわたるワークショップ形式で進んでいき、IDEOなど一流のファシリテーターは国内外の一流デザインチーム、ビジネススクール教授、コンサルタントなど多岐にわたっている。机上の空論ではなく実際に行い成功してる方々から経験やサービスのデザイン、未来予測、社会問題の解決など、さまざまな課題にクリエイティブに挑戦している。本書はカラー写真を多数掲載して、ワークショップの成果からイノベーションを生むプロセスと思考法を抽出して、すぐに役立つ思考ツールを紹介している。

一つのテーマについて、徹底的に問題を掘り下げ、非線形的な方法で解を導いている。いまの時代に必要なのはこういうやり方だと思うので、ぜひ社会人や大学生・高校生に読んでもらいたい本である。

この本で書かれている「イノベーションのつくりかた」は大きく３つのプロセスからできている。それは「あつめる」「ひきだす」「つくってみる」の３つである。

i.school のエグゼクティブ・ディレクターの堀井秀之教授によれば、知の構造化センターは、膨大な知識に対して知の構造化技術（情報や知識の間の関係性を抽出し、可視化する技術）を適用することにより、知的発見やイノベーション、問題解決、意思決定、人材育成に役立てるための方法論を構築することを目的として2007年から活動を行なっており、そこで開発

されたツールをワークショップで利用することにより、イノベーションを生み出す力をより強力なものにすることを目指し、将来的には、i.school の活動自体を研究対象として、認知科学、知能工学、脳科学、組織学習論など、さまざまな視点からの研究材料を提供し、イノベーション・サイエンスと呼べるような研究領域を生み出すことも期待するとされている。

i.school の具体的な目標は、『確かにそれこそ解決するべき課題だ』と気付く『目的』と、『こんな上手い方法があったのか』と人々をうならせる『手段』を見つけ出す力を養いつつ試行し、学生に新しいアイデアを生む達成感と成功体験を提供し、社会でイノベーティブな成果を上げることを目指した「人間中心のイノベーション」であると言える。ただし、イノベーションのうち、「物」や、自然科学における「発見」を目指すようなことは直接の対象とはしていないようである。

以上より、未来予測の手法に基づいて、これからの時代に必要となるイノベーションを考えるハウツーとして役立つ点もあるが、予測不可能なイノベーション等の何を開発しようとするのか、世の中のどんな問題点を革新しようとするのかを見つけ出す方法としては課題がある。

宇宙や地球の歴史、人類史、気象、経済、科学、未来学等あらゆる分野から横断的に総合的に研究する中で、次の知識社会の在り方を考え行動する必要がある。そのためには、異文化・異世代・異業種の世界的規模のネットワークを構築し討論する中で新たな社会に貢献できる人材が生まれると確信する。幕末の坂本龍馬は思い立ったときに勝海舟など一流の方の話を聞きに諸国をまわっている。本物を見て一流の人とのネットワークを形成して多角的な視点で今の時代を読み解く必要がある。

兵庫県立長田商業高等学校
校長　南谷雄司